れたれば、一先郷里より餘り遠からざる學校に奉職し、殆んど一ヶ年間無缺席の證明を得て大いに意を強ふして居られた。其内新城教授及山本助教授の好意により、京都大學に雇るゝ事となり、其の決定的通知を受けたる時は、天にも昇りたる愉快を感じ居られた。是れ、同君の學術研究大家の側に行かるゝ事の、如何に樂しく又自分の多年の希望を達し得たるが爲なるべし。大學へ入りて以來の消息の詳細は私の知らざる處なるも、短日月の間幸ひ佐々木彗星の名をなさしめたるは、偏に神の同君の熱心を憐み賜ひし爲なるべし。

君又た書を能くし、極めて器用なり。是れ學校にてならひしならんも、亦天才なりと思ふ。

要するに、君は熱心なる研究家なる而已ならず、又體育訓練精神修養の爲め大に奮勵せられた。其結果、彼れは當世稀れに見る人格家で、人に對する極めて親切、長者を敬ひ、幼者を助け、人の恩を忘れず、人を誘らず。私も君と交り、大に此點に於ても感服せり。元來君は交際家に非らざれば多くの友達は無き樣だつたが、其の友たる皆親友の樣なりし。彼は只學德の篤き人と好んで交るを欲し、常に之を求めたり。只天彼に藉すに今數十年を以てせば、彼自身に於ても、又學術界に於ても、滿足なる好成績を齎せしならん。惜哉、悲哉、嗚呼。

佐々木君の想ひ出

理學士　百濟敎猷

大正七年の秋頃、鷲座の新星の目測光度に就き未知の人の觀測も整約して居た。其時其人の名を知らないので「Tegami no Hito」の分として觀測手帖に書きとめて置いたことがある。其「手紙の人」は卽ち佐々木君であつた。其頃佐々木君は郷里の家であの新星を眺めて居られたのである。

翌年五月京都へ來られることになつて十六日の朝大學の星學研究室で始めて挨拶をした。丁度太　面に肉眼で見ゐる位の大きな黑點が現はれて居た時で緣の草原に立て黑點は見ゐますかと話をしたことを覺ゑて居る。

天文と機關車とは大好きな私は佐々木君とも其方面から心安くなつて來た。其頃は日曜祭日でもかまはず研究室に行つて居たので、終ひには天文臺の三人が毎日顏を合はさぬことは無い位であつた。

佐々木君は器用な質の人であつた、懷中時計の細かい器械を分解し掃除して半日位費されることも尠

くなかつた。自分で小さな六分儀のやうな者を作つたり天頂儀を眞似た手製の張り子の眼鏡もこしらへたりして居られた樣である。私も眼鏡を作るのは好きて隨分長い筒をこしらへて七吋位の單レンズの望遠鏡も作つたが佐々木君のやうに測角機は作らなかつた。そんな手製の道具で所謂觀測をして居られたのだと聞いて凝り性だと感心してしまつた。

觀測天文學の大家ハーシェルが好きでさう云ふ方面に志して居られた佐々木君と、天體の運動の方面を主にして傍らリクリエーションとして空の星を眺めて居た私とは必ずしも同じ路を辿つては居なかつた。併し澄み渡つた大空を眺めて星にチャームされることを忘れない點に於て共通の立場にあつた——京都で佐々木君と親しい接觸を保つて居た中重要なことは此方面であつた。

大正八年十月二十五日の夜八時頃ひとり星學研究室でアンドワイエーの「太陰運動論」を讀んで居たら佐々木君が靜寂を破つて「今一寸變な者が見ねたから」と呼びに來られたので早速露滋い草原へ飛び出した——別にあわてゝは居なかつたが兎に角其時に机からアンドワイエーの本を落したはずみに表紙が半分程はなれてしまつた、今に其儘持て居るので時々あの晩の光景を想ひ出す——飛び出して四吋赤道儀でのぞくと成程ボンヤリした直徑七八分位で光輝九等程の星雲狀の者が山羊座ベータ星の南十度邊に見ねた。私は二十分間程眺めて居たが動かない樣だし星圖(フラムマリオンの)には丁度其邊に星雲が記されて居たので或はそれかも知れぬと思つて「念のため見取圖を取て置かれたら」と話し合ひ又室へ戻つた。其翌晩は私は學校へ行かなかつたし此變な者のことも一寸忘れて居た、所が二十七日の朝あの者は昨晩確に動いたらしいと言はれてそれから三人で大分話がはずんで結局彗星だと一致した。此れが卽ちフインレー週期彗星(週期六年半)であつたのである。彗星を見つけることを專門にして居る人でも平均百二十時間探して一個を發見する割合だ等と言はれて居るのに運よく獲物を捕へられたのは誠に佐々木君の短い生涯を飾るべき出來事であつた。

昨年の春は大阪へ遊びに來られて一所に近郊へ出かけたこともあつたのに、もう今年は花の咲くのも待たずに早世せられて居るとは誠に哀悼の感に堪ねない。(三月中旬　於東都飯倉)